

info DRIVE ジャマガジン

Jamagazine

Japan Automobile

Manufacturers Association

日本自動車工業会 広報誌

JAMA vol.53

2019

[January-February]

1-2

月号



特集

2019年自動車工業団体 新春賀詞交歓会

100年に一度の変革をチャンスに、お役に立ちたいという想い

米国発

「2019デトロイト モーターショー」「CES2019」

日本自動車会議所主催 モータースポーツ試乗会&トークセッション

東京オートサロン2019



JAMA

一般社団法人 日本自動車工業会



2019年2月-4月自動車関連イベント









 は二輪レース
 は四輪レース

国内主要イベント

日時	場所	名称
2月 1-3日	千葉県 幕張メッセ	ジャパンキャンピングカーショー
9-11日	大阪府 インテックス大阪	大阪オートメッセ 2019
23-24日	神奈川県 パシフィコ横浜	ノスタルジック2days
23-24日	愛知県 ポートメッセなごや	NAGOYA オートトレンド'2019
3月 2-3日	三重県 鈴鹿サーキット	モースポフェス2019 SUZUKA~モータースポーツファン感謝デー~
15-17日	大阪府 インテックス大阪	第35回 大阪モーターサイクルショー2019
23-24日	東京都 東京ビッグサイト	第46回 東京モーターサイクルショー2019
4月 5-7日	千葉県 幕張メッセ	オートモビルカウンスル2019
6-7日	東京都 臨海副都心地区	モータースポーツジャパン 2019 フェスティバル イン お台場

国内モータースポーツ

日時	場所	名称
1月31日-2月3日	群馬県 嬬恋村	 全日本ラリー選手権 第1戦 Rally of Tsumagoi
3月 15-17日	愛知県 新城市	 全日本ラリー選手権 第2戦 新城ラリー2019
24日	三重県 鈴鹿サーキット	 スーパー耐久 第1戦
4月 7日	栃木県 ツインリンクもてぎ	 全日本ロードレース選手権 第1戦
12-14日	佐賀県 唐津市	 全日本ラリー選手権 第3戦 ツール・ド・九州2019 in 唐津
14日	岡山県 岡山国際サーキット	 SUPER GT Round 1 OKAYAMA GT 300km RACE
14日	熊本県 HSR九州	 全日本モトクロス選手権 第1戦
21日	三重県 鈴鹿サーキット	 全日本スーパーフォーミュラ選手権 第1戦
21日	三重県 鈴鹿サーキット	 全日本ロードレース選手権 第2戦
28日	宮城県 スポーツランドSUGO	 スーパー耐久 第2戦

海外モーターショー/主要イベント

日時	場所	名称
2月 9-18日	アメリカ シカゴ	シカゴ・オートショー
3月 7-17日	スイス ジュネーブ	ジュネーブモーターショー
4月 19-28日	アメリカ ニューヨーク	ニューヨークモーターショー
20-25日	中国 上海	上海モーターショー

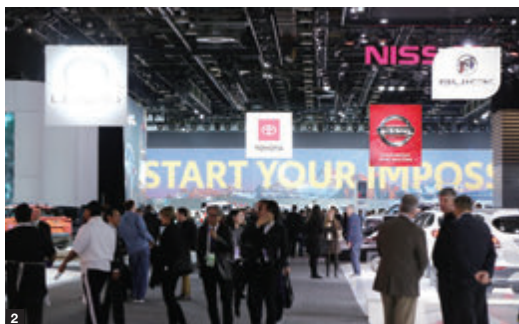
海外モータースポーツ

日時	場所	名称
2月 14-17日	スウェーデン トルスビー	 WRC 第2戦 ラリースウェーデン
16日	メキシコ エルマノス・ロドリゲス・サーキット	 FORMULA-E 第4戦 メキシコシティE-PRIX
3月 7-10日	メキシコ	 WRC 第3戦 ラリーメキシコ
10日	中国 香港	 FORMULA-E 第5戦 香港E-PRIX
10日	カタール ロサイル・インターナショナル・サーキット	 Moto GP 第1戦カタールGP
15日	アメリカ セプリング・インターナショナル・レースウェイ	 WEC 第6戦 セプリング1000マイル
23日	中国 三亜	 FORMULA-E 第6戦 三亜E-PRIX
28-31日	フランス	 WRC 第4戦 ラリーフランス
31日	アルゼンチンアウトロー・ホテルマス・デリオ・オンド	 Moto GP 第2戦アルゼンチンGP
4月 12日	アメリカ サーキット・オブ・ジ・アメリカズ	 Moto GP 第3戦アメリカGP
13日	イタリア ローマ	 FORMULA-E 第7戦 ローマE-PRIX
20日	フランス ブガッティ・サーキット	 モトス24時間
25-28日	アルゼンチン	 WRC 第5戦 ラリーアルゼンチン
27日	フランス パリ	 FORMULA-E 第8戦 パリE-PRIX

JAMAGAZINE 2019年 1-2月号

発行日 平成31年1月30日
発行人 一般社団法人 日本自動車工業会
発行所 一般社団法人 日本自動車工業会
〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目1番30号 日本自動車会館
広報室・電話番号 03(5405)6119

©禁無断転載：一般社団法人 日本自動車工業会



02

特集

2019年自動車工業団体 新春賀詞交歓会

米国発!

08
12

2019デトロイトモーターショー CES2019

14

日本自動車会議所主催 モータースポーツ試乗& トークセッション(12月18日開催)

16

TOKYO AUTO SALON 2019

21

記者の窓

「外国人活用よみがえる10年前の記憶」

西日本新聞社 吉田 修平



- 1 自動車工業団体 新春賀詞交歓会
- 2 2019デトロイトモーターショー
- 3 CES2019
- 4 モータースポーツ試乗
- 5 6 TOKYO AUTO SALON 2019

●JAMAGAZINEは自工会WEBサイトからもご覧いただけます

[www.jama.or.jp/lib/
jamagazine/index.html](http://www.jama.or.jp/lib/jamagazine/index.html)





100年に一度の 変革をチャンスに

お役に立ちたい という想い

自動車工業4団体主催(日本自動車工業会・日本自動車部品工業会・日本自動車車体工業会・日本自動車機械器具工業会)による「2019 自動車工業団体 新春賀詞交歓会」が1月7日に都内のホテルで開催され、自動車関連の政、官、財界関係者約2000人が出席しました。来賓の経済産業省の関芳弘副大臣や国土交通省の石井啓一大臣から、日本経済と人々の暮らしを支える自動車産業の重要性が述べられ、日本自動車工業会の豊田章男会長からは「将来に渡って、日本のために役立っていこう」と改めて自動車業界の真の想いを語られました。

豊田章男 日本自動車工業会 会長

《主催団体挨拶》

**自動車はホームカントリー！
ホームタウンから
ホームプラネットに**

新年あけましておめでとうございませう。本日はご多忙のところ、多くの皆さまに、ご臨席を賜りまして、誠にありがとうございます。後ほど、関経済産業副大臣、石井国土交通大臣から、ご祝辞をいただきますが、公務ご多忙なところ、厚く御礼を申し上げます。自動車工業4団体を代表いたしまして、新年のご挨拶を申し上げます。

■史上初、恒久減税に感謝

我々から、まず、一番に申し上げます。いかなることも、やはり自動車税に、史上初めて恒久減税のご決断を頂いたことへのお礼です。お骨折りいただきました全ての方々に、改めてお礼申し上げます。

もつひとつ感謝を述べたいのは、この件に関係する皆さまが、「日本の自動車税は世界一高



い」「税金だけでも携帯電話使用料よりも高い」「そして「複雑すぎる」…、こうしたお客様への想いをワンボイスで訴え続けていただいたこと、でございます。

今までは、「軽自動車対登録車」とか「車体課税対地方財源」など、少なからず対立軸がありました。しかし、今回は、皆さま、お客様視点で「枚岩になつていただき、それが、この結果に繋が



2019年自動車工業団体

日本自動車工業会 日本自動車部品工業会 日本自動車

いただければと思います。

■国や国民のために…

自動車産業は、国や国民のために、お役に立ちたいという想いを出発点に、先人たちが国産車をつくり、その歴史が始まりました。そして、国からの支援もいただき、今、このように大きな産業に成長させていただきました。

■今、踏ん張りどころ

自動車産業は今、100年に一度の大変革期を迎えています。クルマは街と繋がり、社会システムに進化していく…いわばクルマという存在自体がモデルチェンジをしていくという時です。これに向け、いま我々は、本当に、踏ん張りどころにあると思います。

りました。皆さま、ありがとうございます。ありがとうございました。

■本当の想いはもつと納税

昨年、我々は、税金を「下げて、下げて」と、一貫してお願いしてまいりました。たしかに、我々の願いは、文字通り「下げてほしい」ということでしたが、その根底にある、本当の想いは、「もつと税金を納めていきたい」といっています。

こういうことを言いますと、この部分だけをマスコミの方に切り取られ「自工会 豊田会長、減税はもつと十分」というような見出しが出てしまいそうです。が、焦らずに、この先も、聞いて

います。人々の生活を豊かなものにするため、雇用を生み出す…、こうして、今も国のお役に立てていること、嬉しく思います。

また、納税と言つ面で見ましても、「企業」「就業者」「ユーザーの皆様」それぞれが納めるものを試算してみると、全部で、およそ15兆円ございます。国地方合わせた税収全体の15%くらいになるかと思いますが、この面でも、企業市民としての義務を果たしていけていることは、本当に大切なことだと考えております。

■モデルチェンジ先は笑顔

そして、そのモデルチェンジの先にあるものは、人々の、更なる笑顔だと信じています。クルマが、もつと社会と繋がれば、過疎化



日本自動車工業会の豊田章男会長
今までのホームタウン、ホームカントリーという想いは、大切に引き継ぎながらも、それをオーバーライドする“ホームプラネット”という大きな傘となるビジョンが必要で

や高齢化といった日本が抱える様々な悩みへのチカラになっていけるはずです。また、貧困や医療など、地球規模で抱える大きな課題にも、もっとお役に立てるとも信じております。

世界の笑顔を増やす、新たなリード役に、日本がなっていけるのであれば、我々、自動車産業はその一翼となるべく力の限りを尽くしたい。そう思っております。そのためには、我々が紡いできた、ものづくりの力を、なんとしても守らせてほしい。我々にはその想いしかありません。そのためにも、もっと多くのお客様に、クルマに乗っていただくたい。もちろん、我々が、もっと魅力的なクルマを作っていくことなしに、それは成し得ません。まずはその努力を続けます。

■さらなる改善が必要

一方で、冒頭に申し上げた「世界高い」「携帯の倍もある」「そして「複雑な」税制など、クルマに乗りにくい環境は、もっと変えていきたいと思っております。今回、1300億円の減税をいただきました。これが多いのか、少ないのか。ただ、まだまだ世界一のレベルであることは変わりません。依然、アメリカの30倍近いレベルです。販売スタッフも、簡単に説明できない、複雑さも変わっていないと思えます。ぜひ、こうした改善を実現いただく、クルマにもっとお乗りいただけるように。そして、自動車産業に従事する我々は、100年に一度の変革を、なんとしてもチャンスに変えていく。そうさせていただければと思っております。もし、我々がものづくりの力を失ってしまえば、税金を払える産業でなくなってしまう危機感さえございます。

■皆さまと心をひとつに

一方で、我々は、今、もっと、お役にたてるチャンスにあります。

す。だからこそ、その努力を我々にさせてほしい。これが「もっと税金を払い続けたい」と申し上げた、本当の想いでございませう。会場の皆さまは、今まで「減税、減税」と言わせておいて、章男さん、急に何を言い出すんだ。と思われた方もいらっしゃると思いますが、「将来に渡って、日本のために役に立って欲しい」という想いは自動車産業、共通の想いだと思えます。ぜひ、こうした想いで、引き続き、皆さまと、心ひとつにしていければ。と思っております。

■「ホームプラネット」という想い

自動車を起こした先人達は、日本というホームカントリーを笑顔にしようと頑張ってきました。その後、先輩達は、世界各国で、その地をホームタウンと考へながら、そこに住む人々をも笑顔にするようなクルマづくりを続けてきました。2019年からは、クルマそのもののモデルチェンジといつ、今まで経験したことのない、我々自身の大きな変革に向かっています。

クルマがつながる、ようになつた先には、もしかしたら国境など、関係ない世界があるのでは。とも考えております。また、空を見上げれば、そこは境なく繋がっており、環境問題も、みんなの故郷である地球全体の課題です。そう考えますと、今までのホームタウン、ホームカントリーという想いは、大切に引き継ぎながらも、それをオーバーライドする「ホームプラネット」という大きな傘になるビジョンが必要になってくるのではないかと思っております。我々、日本の自動車産業は、ホームプラネットという想いも、新たに意識しながら、さらに多くの笑顔のために、全員で、力を尽くす1年にしていければ。と考えております。ぜひとも、お力をお貸しいただきたいと思えます。みなさま、どうぞ、よろしく願っています。

以上、私からの挨拶とさせていただきます。





経済産業副大臣の関芳弘氏/
自動車産業が直面する大変革を攻めの機会と捉えています

関芳弘氏

経済産業副大臣

《来賓挨拶》

自動車業界は 高い競争力の維持と強化 7月には電動化のアクションプラン

新年、明けましておめでとう
ございます。ただいまご紹介を
いただきました経済産業副大臣
の関芳弘であります。本来なら
世耕弘成経済産業大臣が寄せて
いただきまして新年のご挨拶を
させていただくところでござい
ますが、急遽 政務が入り、本当
に申し訳ありませんが、代理に
てご挨拶を申し述べたいと思っ
ます。

豊田会長をはじめ、自動車業
界で活躍されます皆さまのご出

経済にとりまして、極めて重要
であります。

■車体課税の抜本見直し

まず、業界の長年の悲願でござ
いました車体課税の抜本見直
しにつきましては、平成31年度
与党税制改正大綱の決定を踏ま
えまして、昭和25年の自動車税
創設以来、初めて全車種で自動
車税を恒久的に引き下げます。
特にポリウムゾーンでは約1
割の減税が実現いたします。ま
た、消費税率引き上げ需要平準
化策としていたしましては、1
年間減税で、自動車、軽自動車
の取得価格1%分を減税するな
ど、思い切りましたユーザー負担
の軽減を実現してまいります。

■自動車は他産業牽引役も

安倍政権発足から6年がた
ち。名目GDPは54兆円、正社
員の有効求人倍率は1倍を超
え、2%程度の高水準の賃上げ
が5年連続で実現しておりま
す。自動車業界につきましては、
自動化、電動化、自動走行など、
100年に一度の大改革の時
代が到来をいたしております。
家庭消費の約1割、出荷額、設
備投資額、研究開発費ともに全
製造業の2割を占め、関連雇用
534万人を支え、他の産業を
牽引する自動車業界が高い競争
力を維持、強化することは、日本

■政府一体で交渉

次に通商に関しましては昨
年、米国による追加関税リスク
が顕在化いたしました。首脳間
合意によりまして、当面は追加
関税を免れたものの、今後、米国
とTAG交渉が、いよいよ本格化
してまいります。攻めるべきもの
は攻めるとの方針のもと、政府一

■大変革を攻めに

形成の対応をいたしました。ま
た、世界的に保護主義への
懸念は広がります中、昨年12月
のTPP11発効に続きまして、本
年2月には日EU、EPA発効が
予定されておりまして、2大自
由貿易協定が誕生いたします。
世界で輸出額15兆円超、輸出総
額の2割を誇る自動車産業が、
高い国際競争力を維持、強化で
きますように、TPP11も拡大、
さらには、RCEPの年内妥結
を目標に「自由貿易の旗手」とい
たしまして、自由で公正な経済
圏を拡大してまいります。





国土交通大臣の石井啓一氏／
自動車産業の自動運転、電動化などに対応して技術基準の策定や実証実験の実施、戦略的な税制措置などを適切に対応して参ります。

日本として、皆さまと協議協力をしてまいります。自動車新時代戦略会議を昨年4月に設置をし、7月には電動化を中心に具体的なアクションプランなどを定めた中間とりまとめを公表いたしました。年度末をメドに

石井啓一氏 国土交通大臣

《来賓挨拶》

自動車産業は大変革期 オリ・パラ機運を盛り上げる

新年あけましておめでとうございます。国土交通大臣の石井啓一でございます。

本日は、自動車工業団体「新春賀詞交歓会」が盛大に開催さ

開催予定の第3回会議ではアクションプラン進捗や自動走行、モビリティサービスに関する議論を行うことを予定としております。

さらに下請け取引に関しましては自主行動計画の策定、中小

れますことを心よりお慶び申し上げます。

平成31年の新年を迎え、謹んで新春の御挨拶を申し上げます。

日本の経済を支える基幹産業である自動車産業は、自動運転技術の進展、クルマの電動化、モビリティのサービス化などの新たな動きや変化に象徴されるように、大変革期にあります。

国土交通省としましては、技術基準の策定や実証実験の実施、戦略的な税制措置などを通じて、皆さまと連携し、適切に対応して参ります。

企業への現金払いなど積極的な取り組みに感謝いたしております。型管理の適正化を始め、サプライチェーン全体に浸透させて、付加価値向上に繋げて行くことが、何よりも重要であり、粘り強い取り組みに期待している

■レベル3の実現に向け

まず、自動運転については、「2020年目途の高速道路におけるレベル3の自動運転の実現」などの目標達成に向け、車両安全に係る国際基準の策定を主導しており、昨年10月には自動で車線変更をする機能に関する基準が発効しました。また、物流の生産性向上を図るため、これまで高速道路でのトラックの隊列走行の実証実験に取り組んでおり、今月には新東名高速道路において、後続車無人システムの公道実証を行うこととしております。さらに、自動運転車等の設計・製造過程から使用過程にわたる総合的な安全確保に必要な制度整備の方針に関し、近く報告書を取りまとめること

ところであります。

結びといたしまして、自動車工業団体及び、会員企業皆さまの益々のご発展、そして本日、ご列席の皆さま方のご健勝とご多幸を心から祈念申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

とじています。

■環境性能を重視

次に、地球温暖化対策については、国土交通省としても、燃費基準の強化とともに、グリーン化特例やエコカー減税などの支援措置を通じて、環境性能に優れた自動車の普及促進に努めて参ります。

■日本型Maasを検討

Maas(マース、Mobility as a Service)を含む新たなモビリティは、移動の利便性や効率性の飛躍的な向上をもたらす、都市や地方が抱える様々な課題の解決につながる可能性があります。国土交通省としましては、日本型Maasのあり方

自動車工業団体 新春賀詞交歓会

日本自動車部品工業会 日本自動車車体工業会 日本自動車機械器具工業会



日本自動車部品工業会の岡野教忠会長／従来の技術、従来のビジネス、これをしっかりと守り抜き、新たなモビリティ革命に真正面からチャレンジしていかなければなりません

や今後の取り組みについて検討を進めていくとともに、新たなモビリティの走行空間の確保や、交通ターミナルなどの乗り換え拠点の整備を進めて参ります。

■図柄ナンバーで地域振興

いよいよ来年に迫った東京オ

日本の将来に向け自動車産業は重要

岡野教忠氏

日本自動車部品工業会

会長

《主催4団体を代表して
乾杯の挨拶》

本日、政界、官界、産業界の各分野から、大勢の方に出席をしていただいています。今日は2千人くらいの方がご臨席されているということです。昨年5月に部品

工業会の会長に就任しました。

■自動車業界は半世紀の歴史

自動車工業4団体ですが、自動車工業会は52年ほどの歴史、また部品工業会も今年50周年を迎えます。半世紀の歴史があります。この半世紀の歴史、まさしく激動の時代であったという風に感じております。先程のご挨拶でも豊田会長が「平成の時代を振り返り、日本のものづくりを必死に守り続けてきた30年」とおっしゃっておられまし

図柄入りプレートの交付を開始しており、「走る広告塔」として、地域振興が図られるよう取組を進めて参ります。

なお、一昨秋以降、相次いで発覚した完成検査の問題については、ユーザーからの信頼を確固たるものとするためにも、二度と同じ問題を起こさぬよう、

た。また、将来に向かって、守り抜くとチャレンジを明言されておりました。

■モビリティ革命にチャレンジ

今、自動車産業全体の国内の年間出荷額は、60兆円に達しています。日本の製造業全体が300兆円ですので、約2割を占めています。我々、自動車産業は、まさに日本経済の根幹を支える戦略産業であると豊田会長はよくおっしゃっています。自動車産業は日本の将来に向けて、大変、重要な業界になって行きますが、言われているように大変な環境の中で、従来の技術、従来

強い決意を持って取り組んでいただきますよう、お願いいたします。

結びに、我が国の自動車産業にとつて、本年が素晴らしい飛躍の年となること、さらに御列席の皆さま方の御健勝、御繁栄を心より祈念いたしました。新年の御挨拶といたします。



のビジネス、これをしっかりと守り抜き、新たなモビリティ革命に真正面からチャレンジしていかなければなりません。

今年は日本社会にとつて年号が改まります。それでは節目の年を輝かしいものにして行こうということでご出席の方々のますますのご健勝と、ご活躍を祈念しております。

米国発! 「2019デトロイトモーターショー」
(1月14~27日開催)

年初め デトロイトから モーターショー開幕



「スーブラ」への思い入れを語る豊田章男トヨタ自動車社長

■デトロイト モーターショー開幕

2019北米国際自動車ショー（NAIAS、デトロイトモーターショー）が1月14日〜27日までミシガン州デトロイトのコボセンターで開催されました。地元米国の自動車メーカーが市場の約7割を構成するライトリックの新型車を相次いで発表したのに対し、日系自動車メーカーの発表では、走行性能を重視したスポーツモデルが目立ちました。

《トヨタ自動車》 17年ぶりに復活「スーブラ」 「このクルマいいね…」

(豊田社長)

モーターショーにはモーターショーの「クルマの楽しさ」を感じられる魅力があります。今年のNAIASでトヨタ自動車は、17年ぶりに復活する「スーブラ」を世界初公開しました。

14日に開催されたトヨタのプレスカンファレンス。開始と同時にステージに颯爽と登場した真っ赤なスーブラから降りてき

た豊田章男社長は、「このクルマいいね…」と感慨深げにつぶやきました。豊田社長は過去、マスタードライバーになるための訓練でドイツのニルブルクリンクを中古のスーブラで走っていたそうです。その時、自分の周りを走る他メーカーの車は最新のプロトタイプだったため、「当時から密かにこのクルマを復活させたいと願っていた」と同モデルに対する思い入れを語りました。

■「SUUVもついで…」

スーブラは1978年に登場（日本では「セリカXX」）したスポーツクーペです。2002年には環境意識の高まりなどの影響で生産を終了していました。

5代目となる新型は、同モデルの伝統である直列6気筒エンジンに加え、直列4気筒ダウンサイジングターボエンジンをラインアップに設定しました。トランスミッションは8速スポーツAT。ボディにアルミニウムとスチールを使用し、軽量化するとともに、同社「86」の約2.5倍のボディ剛性を実現しています。日本仕様の価格は現時点で



14、15日のプレステー



17年ぶりに復活する5代目「スープラ」

未定ですが、米国での価格は4万9990ドル（約540万円）とのこと。日本では今年春に導入予定だそうです。

豊田社長は言いま「SUVもいいけど、後輪駆動のスポーツカーに勝るものはない」。自動車メーカーには今、自動運転や電動化への対応といった多くのミッションがあります。こうした中で、豊田社長が発した1台のスポーツカーに対する想いに、嬉しさを感じたクルマ好きの私たちは多かつたのではないのでしょうか。



STIは、米国専用の「S209」を披露



左から2019年からスバル・ラリーチームUSAに加入するスコット・スピード氏、STI平川良夫社長、スバル・オブ・アメリカのトーマス・ドール社長兼CEO

《スバル》 初の米国専用モデル登場 クルマの愉しさを訴求

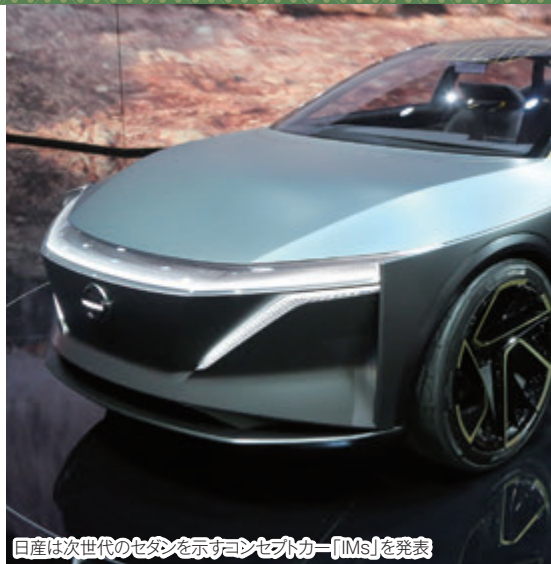
もう1社、日系自動車メーカーでスポーツカーを発表した企業がスバルおよびスバルネットワークインターナショナル（ST

I）です。「STI S209」は、コンパクトカーの最高峰に位置付ける「Sシリーズ」として初の米国市場専用モデルで、限定約200台で発売するとのこと。STIの平川良夫社長は「米国ではまだ日本のようにSTIブランドが浸透していない。昨年に発売した『アセント』でSUVのラインアップがほぼ出揃った今、クルマの愉しさを訴求するモデルを投入していく時期に入った」と米国への導入理由を明かします。

エンジンは米国仕様のWRX STI専用の「EJ25」をベースに専用チューニングを実施。吸気系統には、専用の大型エアクリナーや専用吸気ダクトを採用したほか、排気系にも大口径テールパイプを備えた専用設計低背圧マフラーを採用するなどし、出力は歴代STIモデル最高となる341HP（開発目標値）を実現しました。タイヤもタイヤメーカーの協力を得て、このクルマのためだけに開発したというこだわりよう。購入方法は未定ですが、抽選にせよ、先着にせよ、競争率は非常に高くなりそうです。



インフィニティブランドのEVコンセプト「QXインスピレーション」



日産は次世代のセダンを示すコンセプトカー「IMs」を発表

《日産自動車》 「セダン」の将来性を示す EVコンセプトカー 「IMs」を発表

ライトトラック全盛時代に、「セダン」の将来性に期待感を示したのは日産自動車です。同社は、電気自動車(EV)のコンセプトカー「IMs」を発表しました。同コンセプトカーは、広い室内空間に「2+1+2」の独自のシートレイアウトを採用するとともに、回転式の前席と小型アウトボードシートを両サイドに備えた「プレミアリアセンダーシート」を装備。115キロワットのバッテリーを搭載し、満充電で約611キロメートルを走行可能できる設計です。

北米日産のデニスル・ポットシニアバイスプレジデントは、「EVの場合、特に若年層のニーズはセダンにある」と考えを明かします。

統計調査会社によると、18年の米新車販売台数は前年比0.3%増の1727万4250台でした。その内訳は、SUVやピックアップトラックで構成するライトトラックが同8.0%増

の約1178万台と全体の7割を占めており、乗用車は同13.1%減と明暗が分かれる形となりました。米国自動車メーカーは、こうした状況の中でセダンから撤退する動きも見せています。ただ、日本の自動車メーカーが今回のNAASで発表したモデルの大半はセダンやスポーツカーといった乗用車セグメントでした。「乗用車事業が重要であることに変わりはない」

(トヨタモーターノースアメリカのジム・レンツ最高経営責任者)と、ピックアップこそすれども、依然として約500万台を維持する市場で存在感を高めようとする思惑がうかがえます。

《ホンダ》 力強い走りと幅広い パーソナルユースに対応した ミドルサイズSUV 「バスポート」を展示

ホンダは若年層の獲得をねらい、ブースの一等地に昨年11月に発表したばかりの新型SUV「バスポート」や、スポーツモデル「シビック」と

いった嗜好性の高い車両を展示しました。

バスポートは、ファミリー層に人気のある同社の「パイロット」に対し、車高やホイールサイズを高めるとともに、アウトドアテイストのデザインを採用したSUVで、「よりアクティブにクルマを使いたい若者のニーズにも応えられる」(ホンダ広報担当者)と語ります。



ホンダの新型SUV「バスポート」

自動運転技術コネクテッドカーで 自動車関連が盛り上げる

ミネバダ州ラスベガスで1月8~11日、技術見本市「CES2019」が開催された。CESは家電メーカーらが最新家電を披露する見本市として始まりましたが、ここ数年はIT、デジタル化の活用が進む自動車関連技術の展覧も盛り上がりを見せています。会場全体では人工知能(AI)や商用化が迫る次世代通信規格「5G」に関する紹介が目立ったほか、自動車関連では自動運転技術やコネクテッドカーでのビジネス拡大を狙う企業の展覧が相次ぎました。

■自動車関連
約170社が出展

今回のCESには、世界から4500社が出展し、来場者は約18万人。主催者のコンシューマー・テクノロジー・アソシエーション(CTA)によると、自動車関連企業の展覧は昨年開催より20社多い、約170社でした。自動車業界のトレンドであるCASE(コネクティビティ、自動化、シェアリング、電動化)を見据えた提案が活発でした。

トヨタ

「ガーディアン」技術を披露

CES開幕に先駆けて開かれた報道向けのカンファレンスでは、トヨタ自動車のAI研究子会社トヨタ・リサーチ・インスティテュート(TRI)のギルブラットCEOが登壇し、研究を進めている高度運転支援技術「トヨタガーディアン」の技術について解説しました。ガーディアンは、運転を全てシステムが担うのではなく、人間の運転ミスや弱点をシステムでカバーすることをコンセプトとした技術。

トヨタ自動車
トヨタ・リサーチ・インスティテュート(TRI)のギルブラットCEOが登壇し、新型の自動運転実験車両「TRI-P4」を披露しました



カンファレンスでは、ガーディアン技術を搭載する車両があらじめ加速することで、接触事故を起こしそうな車両から離れておくという例を映像で紹介しました。また同会場では新型の自動運転実験車両を披露。ガーディアンなど自動運転技術の高度化に活用していく方針です。

日産

「インビジブル」を紹介

ブース出展では、日産自動車
が未来のコネクテッドカー技術「インビジブル」を紹介しました。車内外のセンサーが収集した情報とク



日産自動車
3DのAR(拡張現実)アバターが車室内に表れているイメージ。フロドライバーがアバターとして車内に出現したら、最適な運転方法を指導してくれるかも!



日産自動車
将来技術「インビジブル」を発表。ブース内でVRを活用したデモンストラーションを行いました



〈本田技研工業〉
「オートノマス ワーク ビークル」は、アタッチメントを取り付けることで様々な用途に活用できます

〈本田技研工業〉
「P.A.T.H. Bot (パスボット)」は、人との協調に主眼を置いて開発したロボット

〈ホンダ〉 「オートノマス ワーク ビークル」を紹介

ホンダは、公共空間での活用を想定した移動型ロボット「パスボット」や、自律移動モビリティのプラットフォーム「オートノマス ワーク ビークル」を紹介しました。パスボットは、深層学習で人の動きを学習しており、人ごみの中でもぶつからず、目的の地まで最短ルートで移動できるロボットです。オートノマスワーク ビークルは、建設や農業、火災現場など様々なシーン

ラウド上のデータを統合し、それを車内にフィードバックするという技術。例えば乗員が拡張現実（AR）のデバイスを装着すると、遠隔にいる人が操作するアバターとのドライブを体験できたり、見通しの悪いコーナーや対向車の有無をコックピット上に可視化することが可能です。この技術は5Gなど通信技術の発達によって、「コネクテッドカー」でどこまでできるかを突き詰めた（同社）技術コンセプトです。



〈ヤマハ発動機〉
PPMに搭載したAI車掌機能を体験できるデモ走行を会場外で実施。車内の乗員が手を上げると車両が停止するなど、ドライバー不在の自動運転車で乗客をフォローするシステムとなっていました

〈ヤマハ発動機〉
「パブリック・パーソナル・モビリティ（PPM）」は、人や物運ぶ移動サービス用車両として提供します

〈ヤマハ〉 「PPM」を出展

の使用が想定される、自律走行モビリティのプラットフォーム。既に米国で実証実験を始めていくということだ。

ヤマハ発動機は、近距離移動サービスへの活用を想定した小型低速モビリティ「パブリック・パーソナル・モビリティ（PPM）」を出展。乗客を画像で認識

する「AI車掌機能」を搭載しています。乗客の顔画像を自動認識して決済情報と紐付けたり、乗客がジェスチャーで発進や停止を指示できます。特徴的なのは、停止は乗客のうち誰か一人のジェスチャーで実行できる一方、発進には乗客全員のジェスチャーが必要という点。誰か一人がボタンで自動運転車を発進させてトラブルになったときの、責任問題を回避することを考慮したものです。

■レベル3対応の機器

今回のCESの特徴は「部品メーカーの出展が大幅に増えた」（CITA）こと。特に目立ったのが自動運転「レベル3」（緊急時以外は自動運転）の実現に必要な不可欠とされるセンサーのLiDARでした。LiDAR単体はもちろん、カメラ一体型やヘッドランプ内にLiDARを収納するコンセプトを示す例もありました。ここ最近

は検知範囲だけでなく、いかに小型で車体デザインに影響を与えないかという点を考慮するメーカーも増えてきています。

このほかにも完全自動運転車を想定した未来のコンセプトカーのシート技術を披露展示するなど、老舗の部品メーカーの発展も多く目立ちました。自動車の技術だけでなく、シェアリングなど利用者ニーズも大きく変化していく中、将来のビジネス拡大に向けた新技術の提案、商談が活発に繰り広げられていました。

■Maas意識のサプライヤー

デリバリーの業者に一時的に開錠の権限を委譲できるようにあります。

プロ走行をリアル体験 クルマの楽しさ満喫

日本自動車会議所(会長 内山田竹志)トヨタ自動車会長は昨年12月18日、東京・青海のメガウェブでモータースポーツ試乗会を開きました。会議所の会員団体・企業の職員と社員を対象に開いたもので、ノーマル仕様とスポーツ仕様の2タイプの車をプロドライバーの運転で乗り比べました。参加した人たちは普段は味わえないプロの運転テクニックをリアルに体感し、車の楽しさを満喫しました。

■ノーマルとスポーツで

試乗会にはノーマル仕様のトヨタ「ヴィッツ」とスポーツ仕様の「ヴィッツGR」をそれぞれ4台が用意されました。参加者たちは最初にノーマル仕様のヴィッツに乗車して1周13キロのコースを試乗。ドライバーを含む大人4人の乗車にもかか

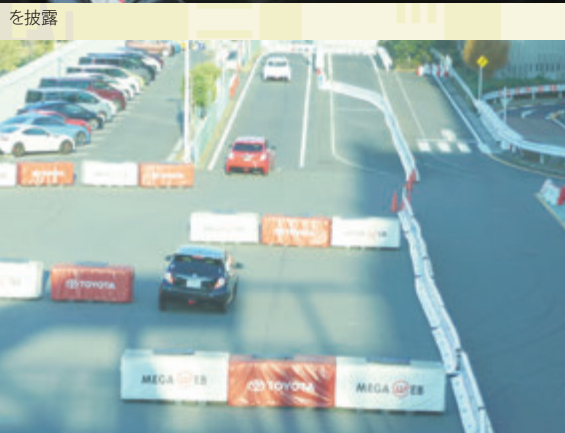
わらず、プロが運転するヴィッツの走りは爽快そのもの。排気量1333ccのノーマルカーとは思えないきびきびとした走りに、同乗者からは「ノーマルでもこんなに凄いと」と驚きの声が上がりました。

■「車への理解が深まった」の声

ノーマル仕様で予想外の走りを体感した参加者たちは、スポーツ仕様でさらに走りの楽しさを満喫しました。時速100キロ以上を超えるトップスピードか

らの急制動、連続するコーナーを吸い付くように走り抜ける感覚など、ノーマル仕様に比べ固めながらも突き上げの少ないしなやかで安定感のある走りを体験しました。

試乗会の終了後、参加者たちは「車への理解が深まった」「このような機会を設けていただきありがたい」と感想を述べ、すっかり満足した様子でした。試乗会が好評だったことから、自動車会議所は来年以降もモータースポーツ試乗を中心とした催しを開いていくことにしています。



『TOYOTA GAZOO Racing』テーマに
トヨタ自動車GRマーケティング部主査の北澤重久さん
自動車ジャーナリストの今井優杏さん

ノーマル仕様とスポーツ仕様の体験試乗の合間には、特設ステージでモータースポーツの魅力伝えるトークセッションが行われました。トヨタ自動車GRマーケティング部の北澤重久主査と、自動車ジャーナリストの今井優杏さんが「TOYOTA GAZOO Racingについて」をテーマに、トヨタのモータースポーツ活動を紹介しました。

■魅力を伝えるトーク

このなかで北澤主査は、国内外でいまどのようなレースが開かれているかをカテゴリー別に解説。トヨタをはじめとする世界の主要メーカーが参戦する世界選手権や地域選手権、カスター

マーモータースポーツの状況や特徴を分かりやすく説明してくれました。

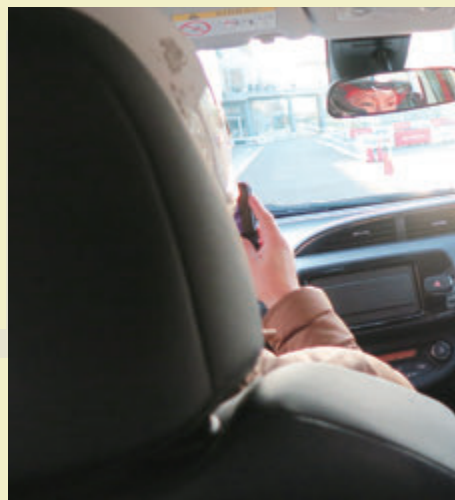
■クルマと人を鍛える

トヨタGAZOOレーシングが活躍する世界ラリー選手権

(WRC)や世界耐久選手権(WEC)、ニルブルクリンク24時間レースの魅力や醍醐味を紹介する場面では、それぞれのレース映像を交えながら、「モータースポーツという極限の状況で自らを革新し続けることでクルマと人は鍛えられます。その挑戦から学ぶことはとても大きいのです」と紹介。豊田章男社長の言葉を伝えながら「モータースポーツが人を鍛え、クルマを鍛えます。レースも、カイゼンに終わりはありません」と話しました。



▲ノーマル仕様とスポーツ仕様を乗り比べ



▲レースチームに所属するプロドライバーが運転テクニック



▲タイトなスラロームを安定して駆け抜ける3台の試乗車



▲試乗は1周1.3kmのコースを2周して行われた。時間が許



▲トヨタのモータースポーツ活動を紹介するトークセッションも好評だった

今回も自動車メーカー9社が出展 3日間で33万666人が来場

日本最大のカスタマイズカーの祭典「東京オートサロン2019」が1月11~13日の3日間、千葉市美浜区の幕張メッセで行われました。37回目を迎えた今回は、自動車メーカーやカスタムパーツメーカーなど426社が出展。走行性能を高める改造を施したチューニングカーやエアロパーツを装着したドレスアップカー、コンセプトカーなど過去最大の906台が展示され、3日間の来場者数は過去最多の33万666人となり、5年連続で30万人を超えました。



■豊かなカーライフを提案

東京オートサロンは1983年に「東京エキサイティングカーショー」として始まり、87年に現在の名称となりました。近年は出展内容も多様化しており、レーシングマシンのデモ走行や市販車両の同乗走行、アーティストによる音楽ライブ、飲食イベントなど、カスタマイズを中心にカーライフを楽しむイベントに成長しています。その潮流は展示車両にも見られます。単にクルマを展示するだけでなく、クルマを改造すること、自分仕様に仕上げたカスタマイズカーを所有することと得られる豊かなカーライフがイメージできる展示も増えています。

■大変革期だからこそ

自動車産業は100年に一度の大変革期に直面している状況ですが、今後、自動車が多機能化しないためにも走る楽しみや所有する喜びなどクルマが持つ本質的な価値を訴求することが重要になっています。その意味でカスタマイズ業界の一大イベントであるオートサロンは重要な役割を担っているのです。自動車メーカー各社が出展する狙いの一つもここにあると言えます。

スズキ

ライフスタイルに合わせ

スズキは軽四輪駆動車「ジムニー」をカスタマイズした「ジムニーサバイブ」を参考出品しました。厳しい自然の中を突き進んでいく力強さと孤高の世界観をイメージしたコンセプトモデルで、外装にはアウターロールゲージとプロテクターを装備しています。

「ジムニーシエラ」をベースにした「ジムニーシエラピックアップアップスタイル」も披露されました。四輪駆動の性能と荷台の利便性を必要としているユーザーをイメージして開発した車両で、DIYを楽しむライフスタイルに合わせた仕様となっています。

「スイフトスポーツ イエローレブ」は本格スポーツモデルです。ボディカラーはショーモデル専用色である「高彩度イエローパール」を採用。フロントに215/35ZR18、リアに225/35R18のスポーツタイヤ、レイズ製ホイールを装備しました。



ジムニーサバイブ



ジムニーシエラピックアップアップスタイル

スバル

スポーティ感を強調

スバルは、スバルテクニカインターナショナル(STI)と共同開発した「フォレスターアドバンススポーツコンセプト」を披露しました。ボディやシートに特別色を配したほか、19インチアルミホイール、ブレンボ製のブレーキを前輪に採用。車高を落として減衰力を最適化したダンパーも装備しています。

「インプレッサSTIスポーツコンセプト」も初公開しました。これまでのSTIスポーツに共通するボルドーカラーのシートを採用し高級感を演出。外観はルーフをブラックにしてツートンカラー化し、マフラーはセンター出しとすることでスポーティ感も強調しました。サスペンションもSTIがチューニングを施し走行性能も高めています。

また、昨年のニュルブルクリンク24時間レースでクラス優勝を飾った「WRX STI NBR CHALLENGE 2018」、スーパーGTに参戦する「BRZ GT300 2018」の2台のモータースポーツ車両も展示しました。



フォレスターアドバンス
スポーツコンセプト



インプレッサ
STIスポーツコンセプト

ダイハツ工業

出展車両が限定販売に

ダイハツ工業は、軽オープンスポーツカー「コペン」をクーペスタイルに仕上げた「コペンクーペ」を出展しました。ハードルーフは炭素繊維強化プラスチック製。開閉式のガラスハッチを採用し荷物の出し入れも可能にしています。

同車は「東京オートサロン2016」に出展していた車両ですが、多くの反響が寄せられたため200台限定で販売することにしました。11日から募集を開始しており、商談権の当選は抽選で決める予定です。限定生産を記念して全ての車両にシリアルナンバープレートが装着されます。

また、「ミラ トコット」をスポーツカー仕様に仕立てた「スポルザVer」、カリフォルニア工務店とコラボレーションした「ハイゼットトラック ジャンボカリフォルニア工務店Ver」なども展示しました。

従業員の有志によってレストアされた往年のレーシングカー「P-5」も出展。1968年の第3回日本グランプリに出場し、GP1クラスで優勝したマシンです。



コペンクーペ



P-5

トヨタ自動車



GRスーパーGTスーパーGTコンセプト



マークX GRMN

トヨタ自動車は、スーパーGTに参戦する「GRスーパーGTスーパーGTコンセプト」を初披露しました。2020年シーズンから投入する新型マシンで、ベース車両は1月14日に開幕したデトロイトモーターショーで市販モデルを発表した新型「スープラ」です。14年ぶりにスープラが国内モータースポーツに復帰することになります。

スポーツカーシリーズ「GR」の限定モデル「マークX GRMN」も発表しました。6速マニュアルトランスミッションとV型6気筒自然吸気エンジンを組み合わせ、FRスポーツセダンに相応しいチューニングを施しています。

また、ダイハツ工業の軽オープンスポーツ「コペン」をベースにした「コペンGRスポーツコンセプト」も初公開しました。

昨年のル・マン24時間耐久レースで優勝した「TS050ハイブリッド」、世界ラリー選手権(WRC)でマンユファクチャラーズタイトルを獲得した「ヤリスWRC」も展示しました。

「GRスーパーGT」を初披露

日産自動車



エクストレイル AUTECH



フォーミュラE参戦マシン

日産自動車とオーテックジャパンは、「エクストレイル」のAUTECH仕様を初公開しました。「セレナ」「ノート」に続くオーテックブランドの第三弾で、内外装をスポーティでプレミアムに仕立てているのが特徴です。インテリアはエクストレイルの中で唯一、本革シートを採用。エクステリアはメタル調フィニッシュの専用パーツによって上質感と先進性を演出しています。

また、昨年9月に日産ブランドアンバサダーに就任したプロテニスプレイヤーの大坂なおみ選手とコラボレーションした「NISSAN GT-R」の特別仕様車も展示しました。

日産ブースでは同社が掲げる「ニッサンインテリジェントモビリティ」を体現するモータースポーツ車両も展示しました。日系メーカーとして初参戦しているフォーミュラEの参戦マシン、そして、電気自動車「リーフ」をベースにした「リーフニスモRC」です。まさに、ゼロエミッション時代のレースマシンです。

ゼロエミッション時代のマシン

日野自動車

先進機能や性能を可視化

日野自動車は大型トラック「プロフィア」、中型トラック「レンジャー」のカスタマイズ車両を展示しました。外装では専用のバンパースポイラーやサイドスポイラー、LED車高灯、マーカーランプなどを装備。フロントマスクもLEDで加飾し、タイヤには専用デカールを施しています。

内装は専用仕様のシート表皮やフロアマット、インパネコンソールにはカーボン調のシルバーのデカールを採用。プロ仕様にカスタマイズしてグレードアップしたトラックを提案しました。

ブース全体の出展コンセプトは「iNFORMATIon DE SIGN」。イラストレーターでメカニックデザイナーの小林誠氏とコラボレーションしたグラフィックデザインを駆使して、目に見えないトラックの先進機能や性能を可視化しているのが特徴です。



日野プロフィア



日野レンジャー

本田技研工業

「TEAM Honda」で戦う宣言

Hondaは今シーズンのモータースポーツ活動体制を発表しました。ブースには国内カテゴリーに参戦するライダー、ドライバーが集結。山本雅史モータースポーツ部長が国内外あらゆるレースカテゴリーにおいて「TEAM Honda」として戦っていくことを宣言しました。

また、「トロロツッ・ホンダ」のF1マシンやモトGPでシリーズチャンピオンを獲得した「RC213V」、スーパーフォーミュラとスーパーGTのチャンピオンマシンなどを展示し、コックピット乗車体験も行いました。

市販車展示では1月31日に発売予定の「ヴェゼル TOURING」をベースにチューニングを施した「ヴェゼル TOURING モデュールXコンセプト2019」を参考出品。また、無限の用品を装着した「インサイト」「CR-V」のほか、「N-VAN」を使った様々なカスタマイズカー、お笑い芸人のチュートリアル福田充徳さんとコラボレーションしたN-VANも注目を集めました。



ヴェゼルTOURING
モデュールXコンセプト2019



N-VAN
チュートリアル福田
カスタム仕様車withFLEX

マツダ



MAZDA3(北米仕様車)



MAZDA3 CUSTOM STYLE(北米仕様の用品装着車)

マツダは新世代商品の第1弾となる新型「MAZDA3(北米仕様ベース・参考出品車)」を国内初公開しました。ハッチバックとセダン、さらに用品装着車「CUSTOM STYLE」を展示。用品装着車はスポーティ感を強調するエアロパッケージを装着し、これに18インチアルミホイールを組み合わせています。

インテリアではスポーツペダルセット、スカッフプレート、フロアマットを採用し、上質でスポーティな空間に仕上げました。運転席乗車体験には90分を超える待ち時間が発生し、発売前にも係わらず人気の高さがうかがい知れました。また、開発主査の別府耕太氏とチーフデザイナーの土田康剛氏によるトークセッションも行われました。

ブースでは「CX-8」「CX-5」「ロードスター」の用品装着車も展示。モータースポーツコーナーでは昨年11月に米国で開催された「2018グローバルマツダMX-5カップチャレンジ(世界一決定戦)」で日本代表として参戦した車両2チームの車両各1台も展示しました。

新型「MAZDA3」を国内初披露

三菱自動車



新型デリカD:5(純正用品装着提案車)



アウトランダーPHEV ストリートスポーツ

三菱自動車は、2018年度内に発売する新型「デリカD:5」を3台披露しました。このうち純正用品装着提案車は、LEDワーキングランプを装着したヘビーデューティーキャリアや、サイドとリアのアンダーガードバー、ブラック化したエンジンフードエンブレムを採用。赤色のマッドフラップも装備することで、タフでアクティブなイメージを醸し出し、家族や仲間と楽しく過ごすレジャーシーンを演出する仕様となっています。

また、スポーティなイメージをオンロードスタイルで表現したカスタマイズカーも展示しました。「アウトランダーPHEV ストリートスポーツ」「エクリプスクロス ストリートスポーツ」は、チタニウムグレーメタリックとブラックマイカの2トーンボディをベースに、ストライプ模様のグラフィック、黄色のアクセントを随所に施すことでスポーツウェアのようなコーディネーションを表現しているのが特徴です。

両車とも245/40ZR20の大径ホイール&タイヤを装着することで足元のスポーティ感も高めています。

新型「デリカD:5」を披露



西日本新聞社

よしだ しゅうへい
吉田 修平

外国人活用よみがえる10年前の記憶

①「西日本新聞という、本社は大阪ですか?」。東京支社に着任して約1年半。名刺交換時には在京企業の方々から、この質問を割と多く投げかけられる。「いえいえ、福岡ですよ」と答えると、驚かれることもしばしばだ。

②当社のことを簡単に紹介したい。前身の「筑紫新聞」は1877年、同年勃発した西南戦争の戦況を伝えるメディアとして誕生。その後は他社との再編を重ね、第2次世界大戦中の1942年に「西日本新聞」になった。満州まで含めた西日本、を広くカバーするという意味合いがあったようだ。現在は九州で約60万部を発行、地域に根ざした記事を発信している。この機会に、ご記憶いただければ幸いです。


③さて、私はといえば、昨夏から2度目の自動車産業担当として取材に携わっている。前回担当したのは、本社経済部にいた2008~09年だった。自動車は九州の主要産業の一つ。トヨタ自動車、日産自動車、ダイハツ工業の生産拠点があるほか、部品メーカーも多数存在する。当時は官民による「北部九州自動車150万台生産拠点推進会議」なる組織も発足。各社の工場新設や能力増強、関連メーカーの進出なども相次ぎ、活況を呈していた。

④ところが、2008年夏ごろから様相が一変。リーマン・ショック後は坂道を転がり落ちるようだった。私は各社の生産計画の下方修正、進出計画の凍結、相次ぐ派遣社員の契約解除などを記事化し

た。まさに業界の盛衰を目の当たりにした。

⑤あれから10年。世界的な景気回復、日銀の大規模金融緩和策などにより、自動車産業をはじめ、異業種も息を吹き返した。国内の目下の課題は人手不足だ。少子高齢化などによって、2030年には国内で600万人超の人手不足に陥るとの民間推計もある。こうした事態に対応しようと、昨年末の臨時国会では外国人労働者を積極的に受け入れる改正入管難民法が成立、4月から施行されることになった。完成車メーカーは対象外だが、自動車部品などを生産する素形材産業をはじめ、建設業、外食業など14業種で外国人労働者の受け入れ拡大が可能となる。

⑥ただ、昨年からは米中貿易摩擦が頭を化したほか、年始にかけては株価が乱高下した。経済情勢の先行きは見通せない。状況次第では、年内に景気後退局面を迎える懸念もある。「安易に外国人労働者を受け入れても良いのか」との疑問が浮かぶ。というのも、10年前の記憶がよみがえるからだ。リーマン・ショックの翌年、政府は大手自動車メーカーの下請けで派遣切りに遭うなどした日系ブラジル人向けの帰国支援事業を打ち出した。在留ブラジル人が一時、半数近くまで減った経緯がある。

⑦今回もまた、外国人労働者が「雇用の調整弁」として使われはしないだろうか。政府は景気後退時には対応する構えだが、懸念は拭えない。法施行後の行方をしっかりと見守りたい。..... 

未来のモータースポーツファンをつくるビッグイベント

モースポフェス2019 SUZUKA

～モータースポーツファン感謝デー～

3月2日(土)・3日(日)初開催

株式会社モビリティランドは、2019年3月2日(土)・3日(日)に鈴鹿サーキット(三重県鈴鹿市)で、トヨタ自動車株式会社と本田技研工業株式会社との3社共催イベント「モースポフェス2019 SUZUKA～モータースポーツファン感謝デー～」を開催予定。

この「モースポフェス2019 SUZUKA～モータースポーツファン感謝デー～」は、メーカーの垣根を越えて、さまざまなモータースポーツの魅力をお伝えするとともに、クルマを運転する楽しさやクルマへの憧れ・夢を育てていただけるイベントとして企画。当日は、国内外の2輪・4輪レースを開催する鈴鹿サーキットを舞台に、TOYOTA GAZOO RacingとHondaの、それぞれ世界選手権をはじめとするカテゴリで活躍するマシンやドライバー、ライダーが出演し、来場者と交流を楽しんでいた。さまざまなコンテンツが用意されます。

モータースポーツファンの方はもちろん、これまでレースやラリーを観戦したことのない学生を中心とした方々や、モビリティをテーマとしたゆうえんち「モートピア」にご来場いただいているファミリーの方まで、モータースポーツの魅力を体感し、楽しんでいただける2日間となります。また、本イベントは公式サイトに掲載されている「特別ご招待券」をご提示いただくと無料でご入場いただけます。

開催概要

開催日程 2019年3月2日(土)・3日(日)

開催場所 鈴鹿サーキット(三重県鈴鹿市)

共催 トヨタ自動車株式会社(TOYOTA GAZOO Racing)

本田技研工業株式会社

株式会社モビリティランド鈴鹿サーキット

入場料金 公式ウェブサイトに掲載の招待券持参で無料

※通常料金:ゆうえんち入園料大人(中学生以上)1,700円、子ども(小学生)800円、幼児(3歳～未就学児)600円)

イベントコンテンツ

- Aston Martin Red Bull Racing F1デモカー(2019年カラーモデル)の走行
- ル・マン24時間レースを制した2輪・4輪マシンの初共演
- WRC2018マニファクチャラーズチャンピオンマシンの走行
- 2017INDY500優勝マシンの走行

をはじめとして、日本のモータースポーツ界をけん引してきた、本山哲選手、脇阪寿一選手、道上龍選手による「新・永遠のライバル対決 本山哲 vs 脇阪寿一 vs 道上龍」などの注目のイベントがたくさん用意されています。



本山 哲選手
(NISSAN)



脇阪 寿一選手
(TOYOTA GAZOO Racing)



道上 龍選手
(Honda)

詳細はhttps://www.suzukacircuit.jp/msfan_s/へアクセス!! ▶▶▶

